

有年牟礼・井田遺跡 発掘調査現地説明会

平成20年12月13日13:00～

事業主体：赤穂市地域整備部区画整理課
調査主体：赤穂市教育委員会

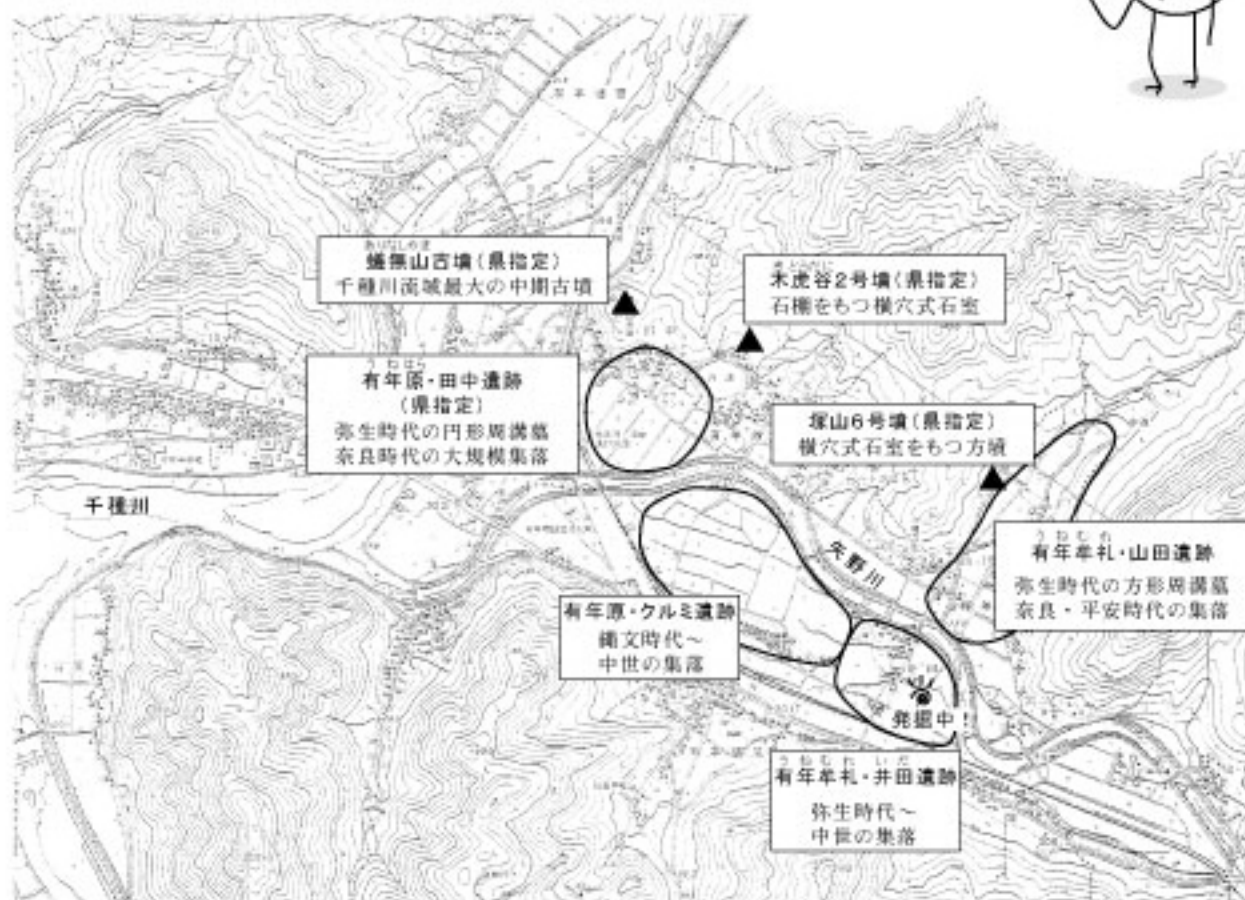
1 これまでの調査

赤穂市教育委員会では、有年土地区画整理事業に伴い、平成18年度から発掘調査を行っています。平成18年度には有年原・クルミ遺跡で縄文遺跡(約4,000年前)を発見し、平成19年度には非常に珍しい弥生時代中期(約2,200年前)の焼失住居を調査することができました。

今年度は、昨年度の隣の調査区となり、またも弥生時代の住居跡などを見つけることができましたのでご報告します。

2 近隣の遺跡

年代がわかっている遺跡のうち、有年地区で最も古い遺跡は、有年原・クルミ遺跡と東有年・沖田遺跡です(縄文後期初頭/約4,000年前)。



有年牟礼・井田遺跡周辺の遺跡



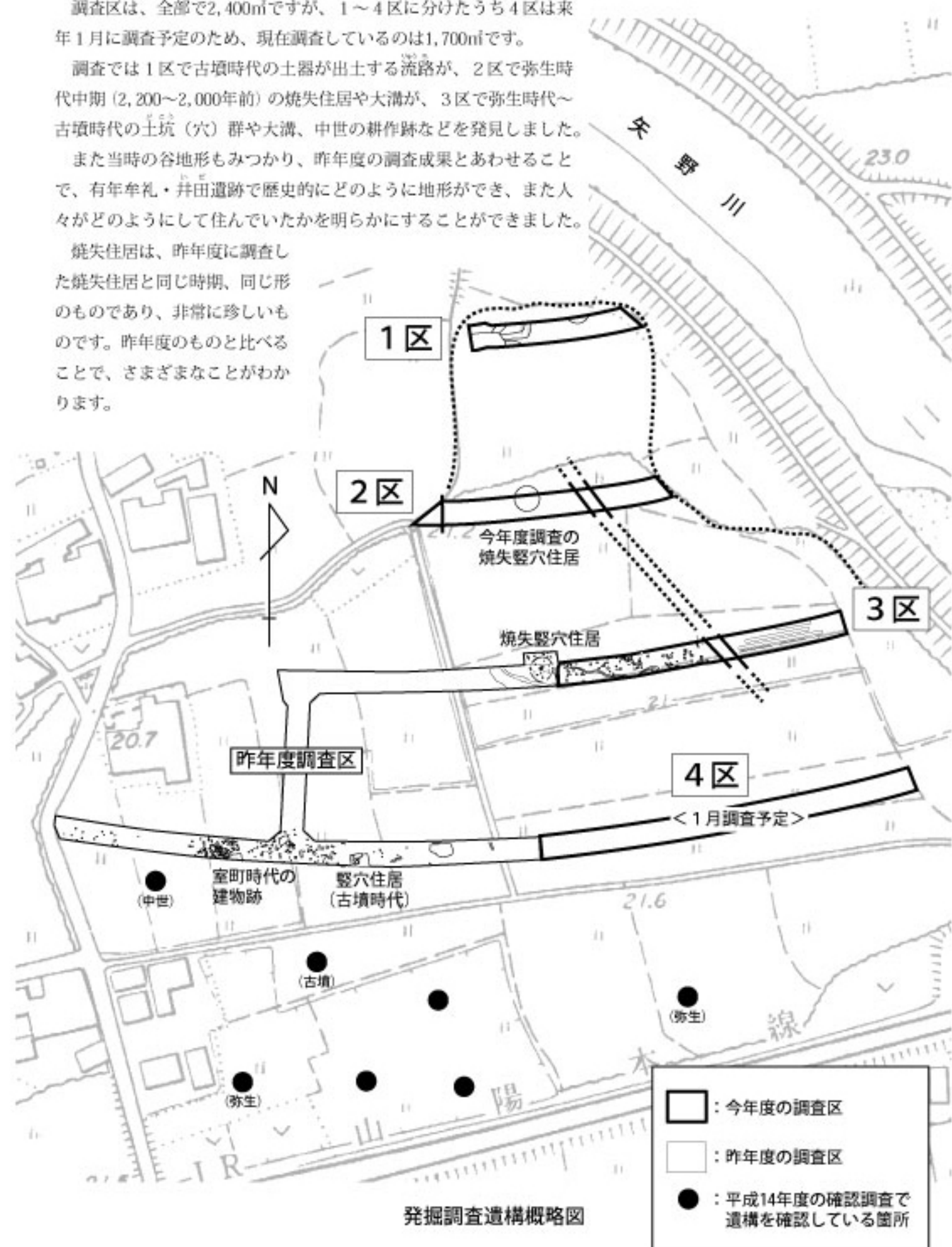
3 調査成果の概要

調査区は、全部で2,400㎡ですが、1～4区に分けたうち4区は来年1月に調査予定のため、現在調査しているのは1,700㎡です。

調査では1区で古墳時代の土器が出土する流路が、2区で弥生時代中期(2,200～2,000年前)の焼失住居や大溝が、3区で弥生時代～古墳時代の土坑(穴)群や大溝、中世の耕作跡などを発見しました。

また当時の谷地形もみつきり、昨年度の調査成果とあわせることで、有年牟礼・井田遺跡で歴史的にどのように地形ができ、また人々がどのようにして住んでいたかを明らかにすることができました。

焼失住居は、昨年度に調査した焼失住居と同じ時期、同じ形のものであり、非常に珍しいものです。昨年度のものとは比べることで、さまざまなことがわかります。



発掘調査遺構概略図

- : 今年度の調査区
- : 昨年度の調査区
- : 平成14年度の確認調査で遺構を確認している箇所

矢野川



1区

古墳時代等の流路
土師器・須恵器、流木?が出土

2区

今回調査した
焼失竪穴住居

谷状落ち込み

大溝
弥生土器が出土!

砂礫(矢野川跡)

3区

前回調査した
焼失竪穴住居

炉跡

粘土探掘坑(近代)

耕作痕(中世~近世)

谷状落ち込み

古墳時代の溝

弥生時代~古墳時代の土坑群

大溝
木材が出土!

昨年度調査区

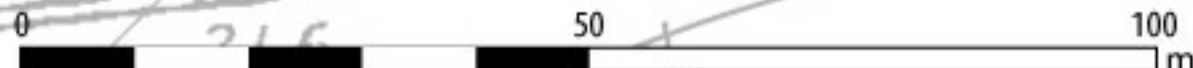
谷

4区

<1月調査予定>

室町時代の建物跡

竪穴住居
(古墳時代後期)
溝(弥生時代中期後半)



20.6

20.1m
20.2m
20.3m

20.4m

20.6m

20.5m

20.7m

20.8m

20.9m

20.7

21.0m

21.5

4 調査成果

今回の調査地点は、矢野川のすぐ近くにあるため、昔にもし地面があったとしても、後に削られている可能性があります。

そのため、調査の目的の一つとして「昔の地形（旧地形）を探る」こと、そして「矢野川によってどれだけ壊されているのか」ということがありました。そこで調査では、いわゆる「ムラの端」を出すことに努めました。

◆1区・・・古墳時代の流路跡

予想では、矢野川によって大きく壊されているのでは、と考えていましたが、結果として地面は無事残されていました。しかし住居や柱穴などといった人々の生活跡は見つかりませんでした。

一方、幅1～2mの溝跡をいくつか確認し、土器片が出土しました。土の質なども含めて考えると、中世に埋まったと思われます。

さらに西端では、とても大規模な流路跡を確認し、内部からは古墳時代後期（6世紀後半）の把手付鍋、須恵器高坏、坏身、坏蓋などが良好な状態で出土したほか、木材も出土しています。一部には手斧で削ったような跡も認められ、人の手が加わった木材であることは明らかです。

このように、形のよい土器などが出土しましたが、当時の人々にとって、家を建てるような場所ではなかったようです。

◆2区・・・弥生時代の焼失竪穴住居、大溝谷状落ち込み

1区に比べ、水路を挟んで地面が若干高くなっている場所であり、集落の確認が期待されました。調査の結果、弥生時代中期中葉～後葉（2,200年～2,000年前）の焼失した竪穴住居を確認したほか、同時期の土坑、谷状の落ち込みも見つかりました。

焼失住居（SH01）は、直径6mの円形竪穴住居ですが、見つかったのは半分で、残りは調査区外に続いています。内部には中央付近に炭が一面に出土し、その上には若干の焼土が認められます。

また、明らかな垂木材が見つかっており、住居の仕組みを考える材料となります。出土遺物も多く、石器片、土器片が多く認められます。

昨年度も焼失住居1棟を確認しており、有年牟礼・井田遺跡で見つかった竪穴住居2棟は、両方とも焼失していたこととなります。

大溝は、3区で見ついている大溝とつながるものと思われます。溝内の堆積土は2つに分かれており、そのちょうど間から弥生土器片が約40点出土しています。

谷状落ち込みは、調査目的の一つであった、「ムラの端」です。これより西側には当時、人が生活する土地ではありませんでした。埋まった土の質から、古代～中世に地面ができたのではないかと考えています。

◆3区・・・弥生時代～古墳時代の土坑群、大溝中世の耕作痕

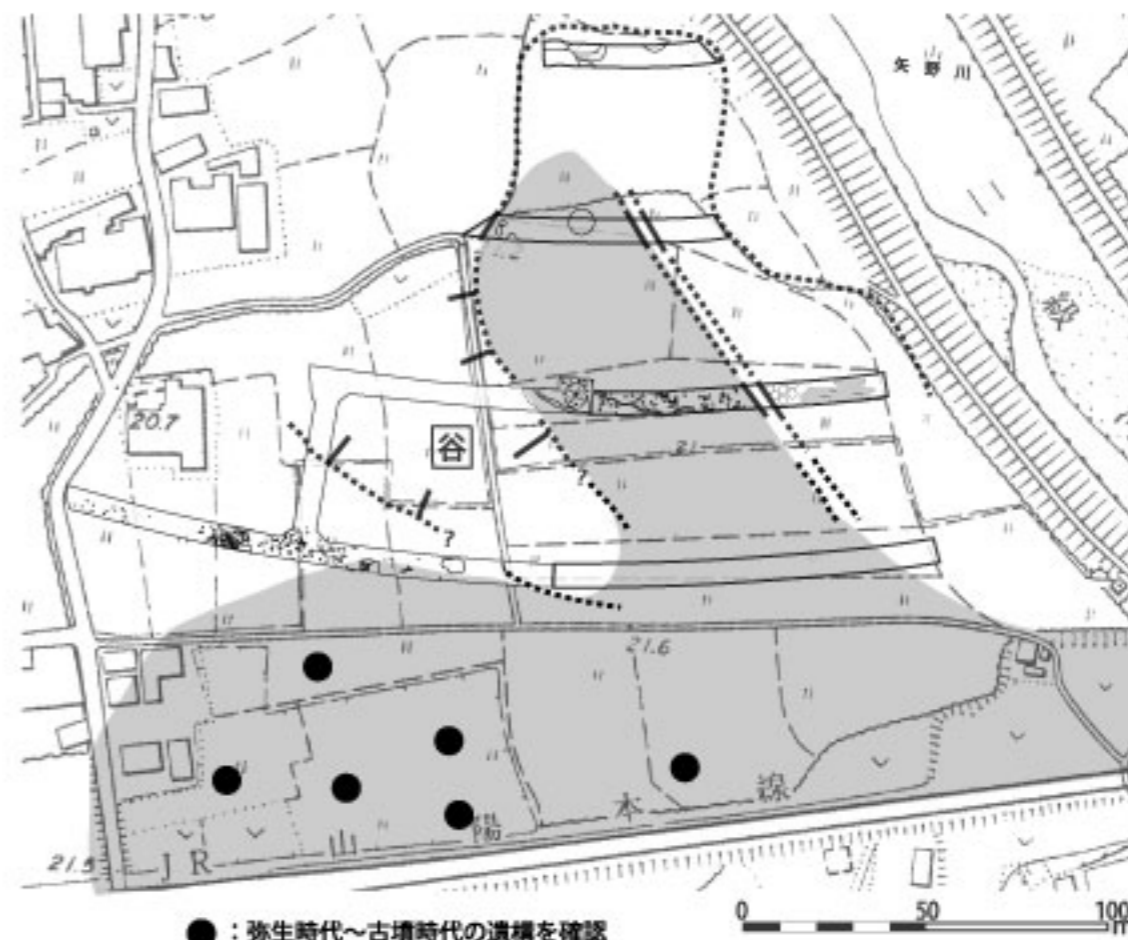
昨年度調査区のすぐ東隣にあります。住居跡は見つかりませんでした。多くの土坑（穴）が発見されました。土器の出土は少ないですが、弥生土器が見つっています。また古墳時代の穴もあるようです。

東側では2区に続く大溝があるほか、その東側には中世～近世の耕作跡のみが見つかりました。

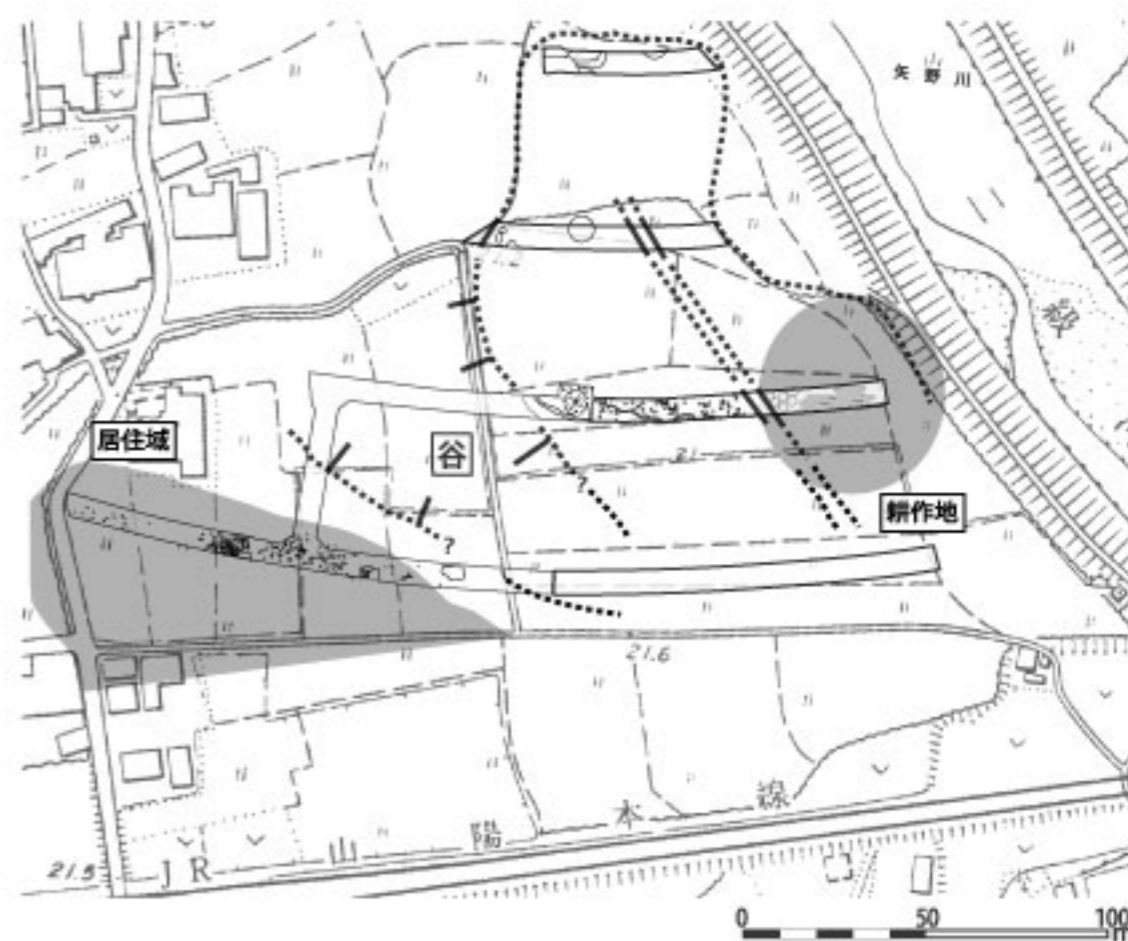
このように、各時期の生活跡がさまざまな場所で見つかり、また「ムラの端」も一部見つけられました。昨年度の調査成果とあわせて考えると、右図のような移り変わりを描くことができます。

弥生時代～古墳時代、南東側の丘陵から広がる緩い斜面の地に人々が住み始め、竪穴住居などが築かれます。東側に作られた溝より東（川側）には家を作らなかったようです。

室町時代になってこの付近は耕作地となり、人々の住む場所は、より西側へと変わってしまいます。これは、人々が谷地形や交通路等の利用の仕方に関係した動きなのかもしれません。



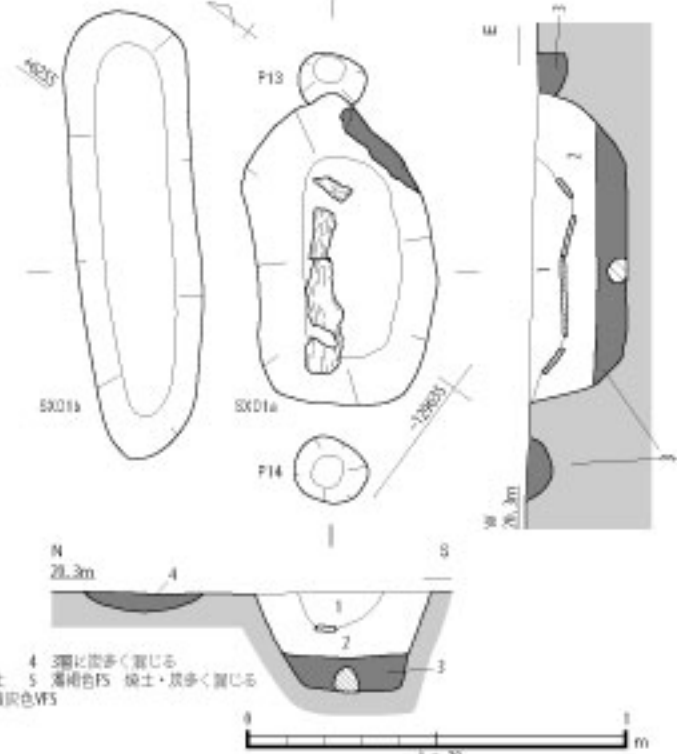
●：弥生時代～古墳時代の遺構を確認
弥生時代～古墳時代の集落範囲



室町時代の集落範囲

◆昨年度調査した焼失竪穴住居の詳細

昨年度の調査で見つかった焼失住居では、多くの炭や焼土が見つかりました。今回見つかった焼失住居とかなり似ており、炭の上に焼土が載っていました。石器（サヌカイト）片が多く見つかった点も同じですが、完全な形の土器は1点もなく、建物の中の生活用品を持ち出してから、建物に火をつけた可能性が高いと言えるでしょう。



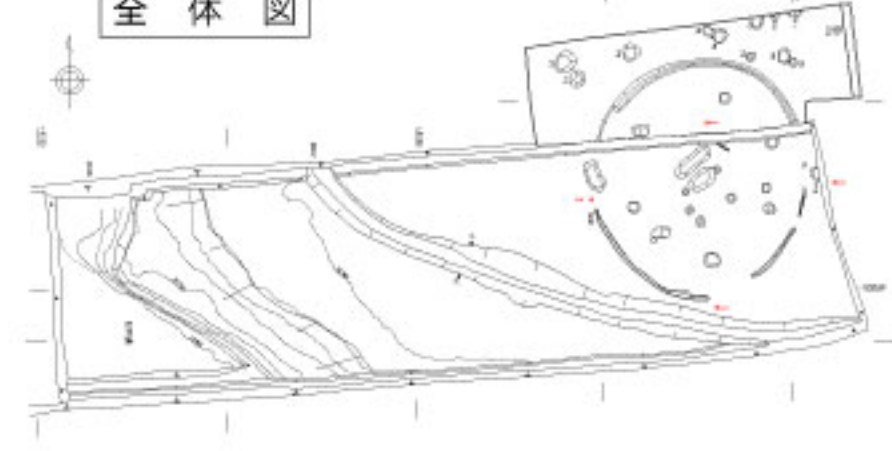
イチマル土坑

イチマル土坑は、竪穴住居内の中央にある土坑（炉穴？）のうち、東瀬戸内地域に特徴的に見られる形のことを言います。

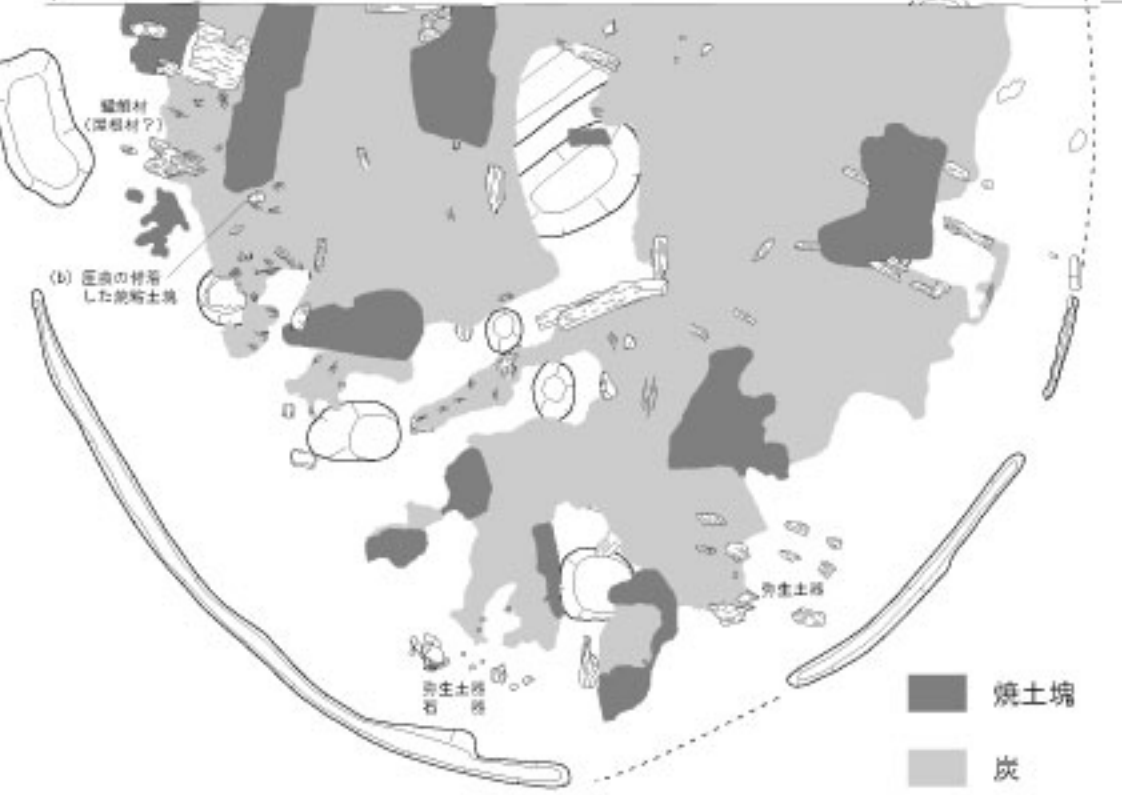
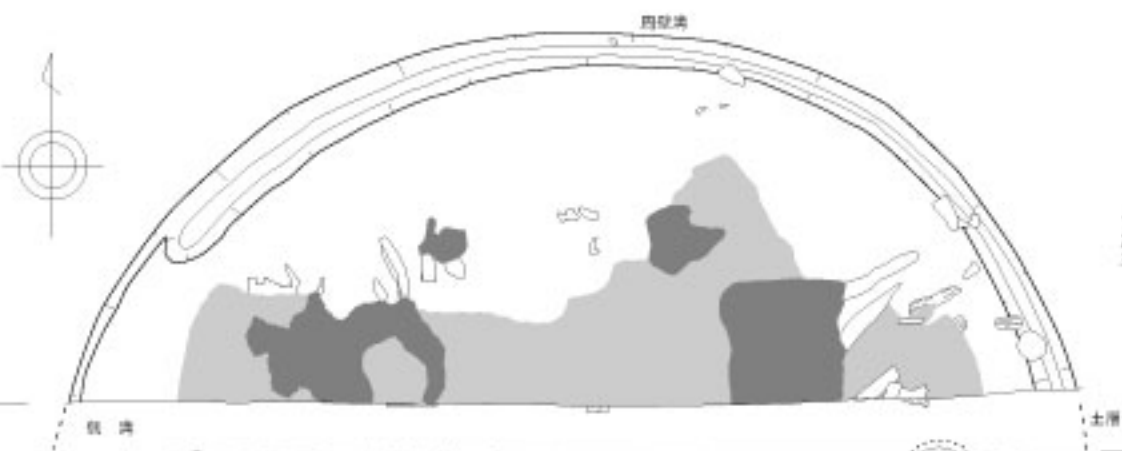
現在のところ、兵庫県南西部、岡山県東部、徳島県、香川県で確認されており、弥生時代中期後半（2100年前）から古墳時代初頭（1800年前）までのものがみついています。

イチマル土坑の特徴として
 (1) 溝状の穴と楕円形の穴の2穴でできている
 (2) イチ土坑がマル土坑の南側にある
 (3) 両脇の穴はイチとマル土坑の間に付く
 などが挙げられますが、有年牟礼・井田遺跡で見つかった住居跡には、以上のような特徴が当てはまりません。マル土坑が長細いことや、両脇の穴の付き方、出土土器などから、初期に作られたイチマル土坑である可能性があります。

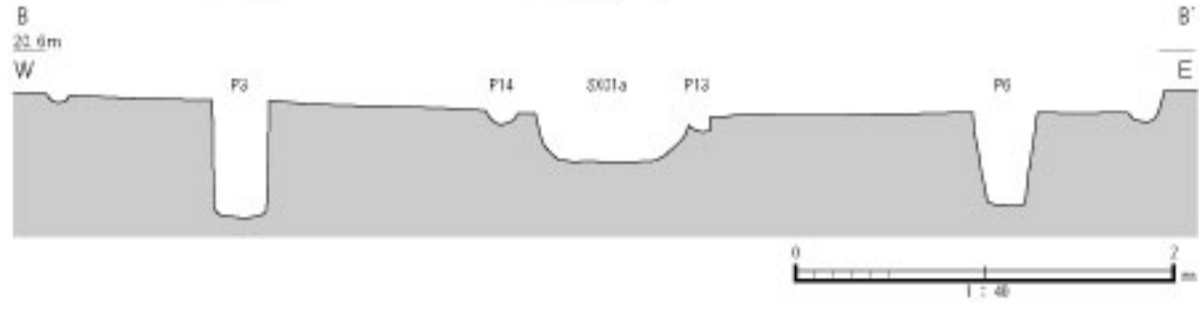
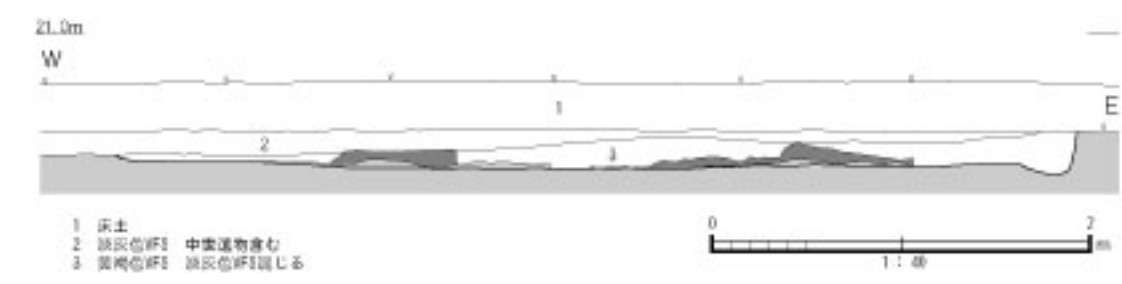
全体図



焼失住居の完掘状況



焼失住居の検出状況

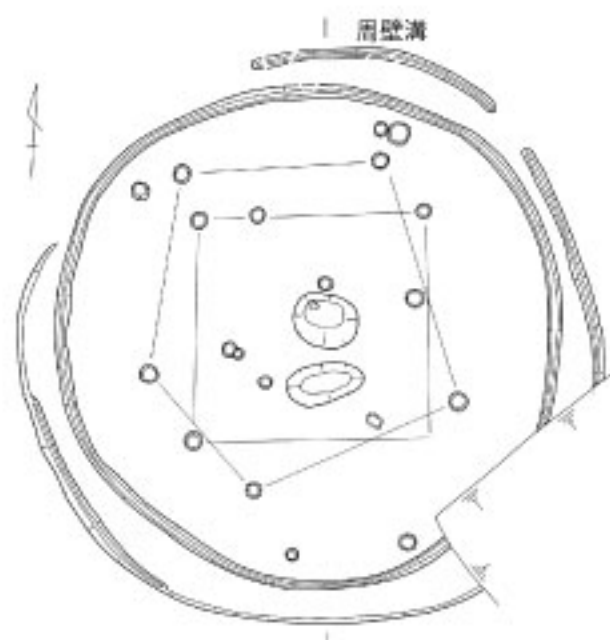


5 有年牟礼・井田遺跡の発掘調査で明らかになること

有年牟礼・井田遺跡で見つかった竪穴住居は、わずか2棟です。しかしこの2棟の発掘によって、今後、多くのことが明らかになります。少し考えてみましょう。

◆短期間のムラ

まず、一般的な集落と比べてみましょう。有年地域には有名な遺跡である有年原・田中遺跡や東有年・沖田遺跡があります。両者とも、有年を代表する弥生時代の集落遺跡であり、竪穴住居が多く見ついているほか、同じ場所に住居の建替えが見られる場合もあります。その場合、右の図のように周壁溝が何重かにめぐっていたり、柱穴がたくさん見つかったりします。



東有年・沖田遺跡で見つかった「切り合い関係をもつ竪穴住居」

こうしたことから、当時のどのような様子が考えられるのでしょうか。

まず、土器などの生活用品が「使われていたまま」で残っていないことは、不意の失火ではなく意図的な焼失を考慮することができます。また有年牟礼・井田遺跡で見つかった竪穴住居が2棟とも焼失し、その後の竪穴住居が見つからないことは、この住居焼失が、ムラの廃絶と大きく関係していると考えられます。

さらに、周辺地域の焼失住居発見事例を調べてみると、焼失住居は、播磨に比べて岡山県での発見が圧倒的に多いことがわかっています。

播磨では新宮宮内遺跡（たつの市）で2棟、玉津田中遺跡（神戸市）で1棟、大中遺跡（播磨町）で4棟程度など散発である一方、岡山県では窪木遺跡で3例、小中遺跡4例、津寺遺跡で5例、百間川兼基遺跡で7例、南溝手遺跡で8例など、たくさん見つっています。

住居の「焼け方」は、住居の形や仕組みにも大きく関係していると思われることから、もしかしたら有年牟礼・井田遺跡の住居は、岡山県のものに似ていたのかもしれませんが。こうしたことも、今後の検討で明らかになることでしょう。

◆土葺きの竪穴住居!?

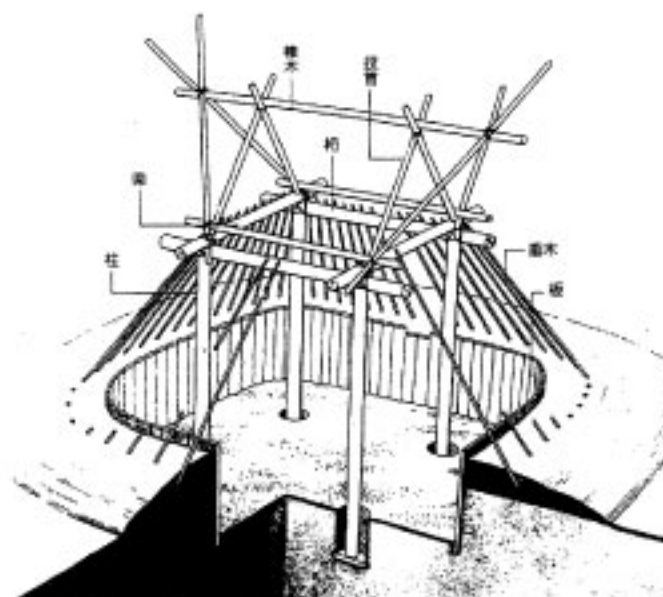
有年牟礼・井田遺跡の焼失竪穴住居は、2棟とも炭面の上に焼土が載っていました。このような例は、焼失住居の多い岡山県でも良い残り方をしたものはすべて同じ特徴を見せており、やはり似た屋根の仕組みをもっていたと考えています。

現在、東有年・沖田遺跡公園の竪穴住居は茅葺き屋根ですが、もしかすると茅の上に一部、土を葺く「土葺き屋根」があったのかもしれませんが。

焼失住居で見つかる「炭」はどのようにしてできるのでしょうか。現在の火事の場合、木が炭となくなっている場合は、「灰になってしまった」と考えます。遺跡の発掘調査ではそれとは別に「それほど燃えずに木として残ったが、腐ってしまった」ということも考えなければなりません。つまり、調査で残っていた炭部分は、大きく燃えたがすぐにバックされて不完全燃焼した「偶然」のものなのです。

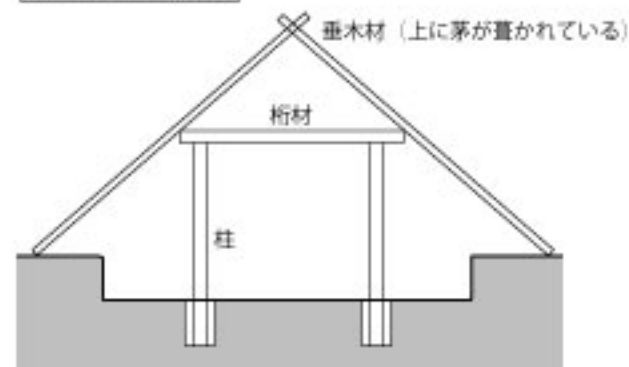
もう一つ考えてみましょう。普通、竪穴住居が使われなくなると、できた窪みに水が溜まり、中埋まった土は黒くなります。しかし有年牟礼・井田遺跡の住居2棟は、住居内の土が当時の地面とたいへん似ていました。土葺き屋根であったと仮定して考えると、「似ていた土」は竪穴住居を作る際に掘った土を、屋根上に載せていたもので、それが火事で崩れて炭をバックし、埋ったと考えることができ、すべて話が合ってくるのです。

今後は、炭化材の樹種を調べたり、年代測定を行うことで、より多くのことがわかるでしょう。

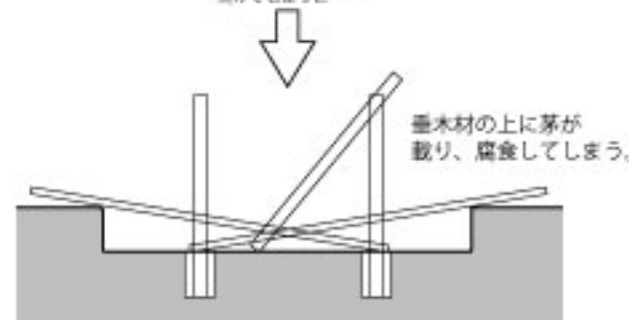


◆推測される住居の焼失過程

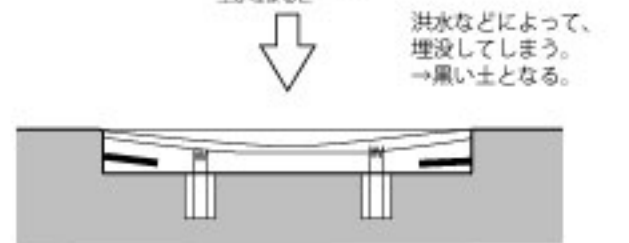
茅葺き住居の場合



傾けてしまうと・・・



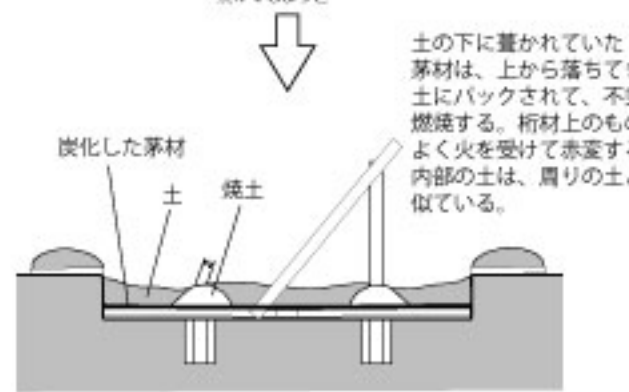
土が埋まると・・・



土葺き住居の場合



傾けてしまうと・・・



◆竪穴住居からみた井田弥生ムラの廃絶

有年牟礼・井田遺跡で見つかった竪穴住居2棟には、いくつかの共通する特徴があります。

- (1) 円形で5～6mの竪穴住居である。
- (2) おそらく6本柱である。
- (3) 土器が示す年代がたいへん似ている。
- (4) 埋まった土の中には、完全な形の土器はなく、土器片、サヌカイト片が多く見られる。
- (5) 住居を埋めた土が、当時の地面の土とたいへん似ている。
- (6) 炭面が中央付近にドーナツ状に見つかり、一部には炭の上に焼土が載っている。

上のようなことから、2棟の住居はおおむね同じ時期の、同じ形式の住居である可能性が高いと言えます。また、同じように焼けたようです。